

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

 2017 年
No. 78

2017年9月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会

THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 鈴木 勲 編集人 中山博邦
© JASE. 2017 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

「第21回関西性教育研修セミナー」報告…………… 1	多様な性のゆくえ⑥…………… 13
性教育の現場を訪ねて⑥…………… 10	今月のブックガイド…………… 14
Dr.上村茂仁の性の悩みクリニック⑱…………… 12	JASEインフォメーション…………… 15

◎「第21回関西性教育研修セミナー」報告

肯定的で健康的な自尊感情とセクシュアリティを育む フィンランドにおける性教育と家庭(親)支援

2017年7月8日(土曜日)午後3時より、大阪・梅田ガクトホールで上記のテーマで第21回関西性教育研修セミナーが開催された。講師は、フィンランドの心理療法士(サイコ・セラピスト)でカップル/家族セラピーや性教育の専門家でSexpo財団でカウンセリング部長などを務めたAntti Ervasti氏。講演後、土肥いつき氏の司会で参加者との質疑応答も活発に行われた。その講演概要と質疑応答を報告する。

主催：関西性教育研修セミナー実行委員会

生徒にリスペクトされる教師

フィンランドにおける性教育と家庭支援、肯定的で健康的な自尊感情とセクシュアリティを育むことの重要性について、お話をさせていただきます。

フィンランドは、北欧諸国の中でも唯一、2回にわたって全国調査、追跡調査が行われている国です。1996年と2006年には、全国の性教育を担当している生物と保健教科の教員を対象とした追跡調査が実施されています。2000年と2006年には、思春期の若者の性知識の程度をはかるという試みとして、全国調査が実施されています。教員対象の全国調査では、1996年に421校、2006年には518校を網羅しています。

思春期の若者の性知識のレベルをはかる調査では、



2000年に401校、2006年には462校、3万人を超える生徒の数を捕捉しています。2006年は、同時に教師と生徒対象に行われて、同じ学校で教師と生徒の両方が協力した学校は339校に上ります。

教師を対象とした調査において、性教育の最も重要な教育的目的とは何、という質問に対して、「責任が

持てるようになる教育をすること、そして、正しい事実を提供することである」と回答しています。

フィンランドにおいて、若い男の子は、あまりオープンに性の発達について、また自分たちのメンタルヘルスについてもあまり話さないという傾向があります。逆に女子の場合は、感情や性の発達について、そしてメンタルヘルスについて話す傾向にあります。

生徒の性知識レベルに、肯定的な影響を与えていた教師の特徴というものを調べています。セクシュアリティに対する自然な態度と寛容さを教えたいと思っている教師です。例えば多様性について、ジェンダーについて、セクシュアリティについて寛容な態度を持っている教師は、生徒からもリスペクトされ、話をよく聞いてもらえるということがわかっています。

2つ目の特徴としては、性的話題について話をすることに抵抗感を現さない。自分自身の個人的な話をも生徒にすることができる、そんな教師像です。

パーソナルな話、個人的な話について、例えば私たち専門家は、専門家としての役割というものがありますので、あまり自分の個人的な話を開示するという事はないというか、すべて開示するという事はありません。けれども、いくつかのことについてはシェアをする気持ちがあるよということを示すことは大事だし、特に性教育にかかわる先生が自分自身がグロウイングアップ、成長するときにどんな思いだったか、どんな経験だったかとか、あるいは個人的なことではなくても、一般的な話としてシェアすることが大事だ、ということがわかっています。

3番目は、ドラマやロール・プレイ、生徒による発表や生徒から話をするなど、生徒とのダイアログ、対話を持ちやすい手法を授業で取り入れている教師というものがリスペクトされ、影響力を与えやすいということがわかっています。それは、ただ単に情報を提供する権威者としているのではないところで、非常にリラックスした雰囲気の中で、生徒たちも先生と話しやすい、関係性を持ちやすい、親しみを持ちやすいということです。

北欧の包括的性教育

北欧で性教育といえば、包括的性教育のことを意味します。実施場所が学校であるかどうかにかかわらず、

包括的教育、性教育というのは、セックス及びセクシュアリティについて、「権利概念」を基本としたアプローチであり、ジェンダーにフォーカスしたアプローチをとる、これが包括的性教育です。

学校で行われるものであれ、家庭で行われる性教育であれ、幼稚園、大学、あるいは障害者施設などで行われる性教育というのは、年齢に応じた情報を提供していくプロセスです。

早期に開始され、生涯を通じて継続されていくべきもの、それが包括的性教育です。私たちは生まれてから生涯を終えるまで、いろいろと心が変わり、セクシュアリティがどうなっていくかわからないわけですから、これは継続的に行われるべきものなのです。

包括的性教育には人間発達に関する正確な情報、人間発達といった場合には、性の発達だけではなく、例えば性器だけでなくメンタルな側面についても発達をどのようにするのかということが含まれてきます。

解剖学および生殖の健康、避妊に関する情報、出産、HIVを含む性感染症、セクシュアリティは異なるライフステージでそれぞれ変化するものであることから、一生を通じて性教育が必要となってきます。

包括的性教育で一番重要なのは次のことです。

COMPREHENSIVE SEX EDUCATION 包括的性教育

- 単に、事実を提供するものではない！
- 若者が、セクシュアリティや生殖の健康について、自身の感情・情緒的スキルや価値を発見・発達し、開発していくことを奨励
- 基本となるのは、家庭生活、人間関係、多様性、文化、セクシュアル・アイデンティティ、ジェンダー・アイデンティティ、境界線（バウンダリー）の重要性、自尊感情、肯定的なセクシュアリティ、身体の肯定などに関する対話
- 人権およびジェンダーの平等の重要性、差別や性的虐待といった脅威、などを強調

<http://www.unfpa.org/comprehensive-sexuality-education>

包括的性教育というのは、単に事実を提供するものではありません。

「若者が」と書いてありますが、「成人」も含めてください。「セクシュアリティや生殖の健康について、自身の感情・情緒的スキルや価値を発見・発達し、開発していくということを奨励」するもの、これが包括的性教育です。

包括的性教育とは、対話です。基本になるのは、家庭生活、人間関係、多様性、文化、セクシュアル・ア



講演する Antti Ervasti 氏

アイデンティティ、ジェンダー・アイデンティティ、バウンダリー（境界線）を引くということの重要性、自尊感情、肯定的なセクシュアリティ、身体の肯定などに関する対話が重要です。

バウンダリーを引く、私たちの体というものに対するイメージ、これは神聖なるもので、ほかの人にさわられたくないところをさわられた、そういうさわりをされたということに対して、責任ある大人にそれを伝え、自分を守っていくということを教えることが大事です。このことは将来、自分自身の体を守るということだけではなくて、自分を守れるということによって、他者をも大切にすることにつながっていきます。

包括的性教育では、人権およびジェンダーの平等の重要性、差別や性的虐待といった脅威などについても、重点的に教えていきます。

次に、親やその他の保護者が担っていくということですが、フィンランドや北欧においても、パーフェクトではないのですが、北欧の親や保護者は、こういった問題について話しやすい環境にはあります。セックスやセクシュアリティ、感情や情緒、身体的発達について、オープンで正直であることが非常に大事になってきます。

オープンで正直であることの正直さというのは、例えば私が親だったとしましょう。子どもと対話をする中で、すごく苦手なことを話さなければいけない場面に立たされたとしたら、私は正直に、「私はこれについて話すのはちょっと苦手なんですよ、なので、ほか

の親戚の誰々さん、あるいはほかの知っている大人の誰々さんに話してもらいましょう」というように、自分がこの話題が苦手だということを伝えます。これも正直さです。

親や保護者もまた、子どもに対して教育をする前に自身が性教育を受けておく必要があります。これは読み、書きやアルファベットを教えるということについてだって、皆さんの言語と私の言語は違うわけですが、共通して、子どもたちに教える場合には自分が知らないと教えられないということはありますね。私たち大人というのは、パーフェクトではないけれども、学習することができます。

うれしいことに、現代というのは、さまざまにいい教材があって、例えばセックスについてどういうふうに話せばいいのか、ジェンダーの多様性についてどう話せばいいのか、家族の多様性ということについてどう触れればいいのか、ということについて、そうしたさまざまな教材、書籍、資料が出回っています。例えば2人親がいるとして、その2人の親が互いに自由に話すことができ、自分の感情やセクシュアリティを意識化したり、そういった話題について、センシビリティを高めるようになること、これも大事です。

性教育というのを、バイオロジー（生物）の授業でやるということもよくあるんですけど、私は生物の授業だけで性教育をやるというのにはちょっと反対です。というのは、そうしてしまうと、セックスというものが生殖に関する事柄に限られてしまうとか、あるいは体の変化とかセックス、そういう限られるものになってしまう。それよりは、健康教育というか、健康情報として性教育をやっていくと、もうちょっと多様な範囲を網羅することができるのではないかと思います。

学校は、時間が限られているので、すべてを網羅することができません。「ユースセンター」と呼ばれる若者を対象としたコミュニティセンター、若者が集ってビリヤードなどをする青少年会館であるとか、NGOなどの団体であるとか、虐待に関係する施設で性教育が行われています。私は、もっともっと広がるべきだと思っています。そういうところにプロの性教育者が配置される、そういう将来というのが必要だと思っています。

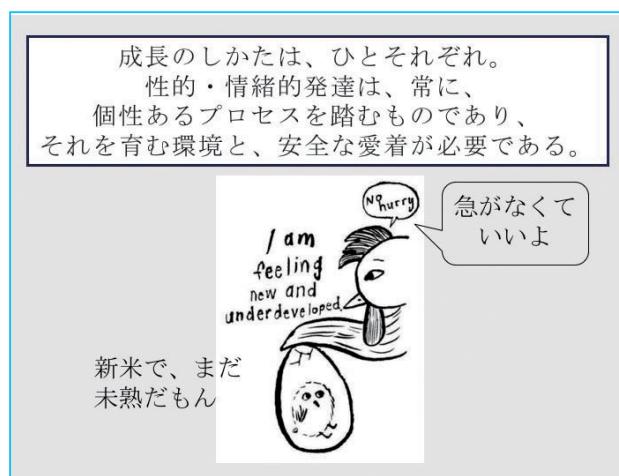
特に重要だと思っているのは、コミュニティセンタ

一、地域の会館みたいなどころに性教育を提供するプロが配置されているということが大事だと思います。特に若者の場合、非常にピースフルに個人を対象としたもの、あるいはグループを対象としたもの、いろいろなかたちで情報が提供される必要があります。集団で感情や情緒、スキルを身につけるためのグループワークをする機会であるとか、あるいはバウンダリー（境界線）を引くということがどういうことかに関するグループワークであるとか、コミュニティセンターを通じて提供されることがいいのではないかと思います。

重要なメッセージ、“No hurry”

セラピーとかを実際の画面でやっているのですけれども、そこで出会ういろいろなケースがあります。お見せする絵とか会話、セリフですけれども、これはすべて実際にそういう状況があったエピソードに基づいてつくられています。

このメッセージその1といいますか、人間は誰しも成長の仕方というのは人それぞれなわけですね。性的、情緒的、感情的な発達というのは、常に個性あるプロセスを踏むもので、それを育む環境と、安全な愛着が必要です。それは、親である場合、保護者である場合もありますし、その人たちが提供できない場合は、その他の周囲の大人によって、安全で愛着のある環境というものを提供されなければなりません。



そこで重要なのは、“No hurry”、「急がなくてもいいよ」というメッセージを子どもたちに伝えてあげることです。

たとえば、友だちはみんなこんな経験をしている、

あんな経験をしている、というようなことがあったとしても、「人は人、あなたはあなたでいいよ、急がなくてもいいよ」というメッセージです。

子どもたちは好奇心いっぱいというのは当たり前、自然な姿でしょう。体やセクシュアリティについて質問したり、探求できるように、安全な環境と、そして、羞恥心を持たせないようにすることが非常に大事になります。

「赤ちゃんはどこから来るの」というような話題、こういう基本的な情報を、正直に、オープンに、年齢に応じて、子どもたちと話し合うべきでしょう。

家族や愛の多様性について、子どもや若者と話をすることが大事です。家族の形というのは本当にいろいろあるんだよ、レインボーな家族、同性同士の親の家族、一人親の家族、親の1人がトランスジェンダーである家族などなど、いろいろなかたちがあるんだよということを子どもたちや若者と話をします。

マスターベーションなど——性に関する重要な事柄の一つがマスターベーションなわけですが——これは当たり前のことで、恥ずかしいことじゃないよというメッセージを子どもや若者に伝えることが大事で、性に対する不必要な罪悪感や有害な羞恥心を持たせないようにすること。なぜならば、それを持ってしまうと、生涯にわたる影響があるかもしれないからです。

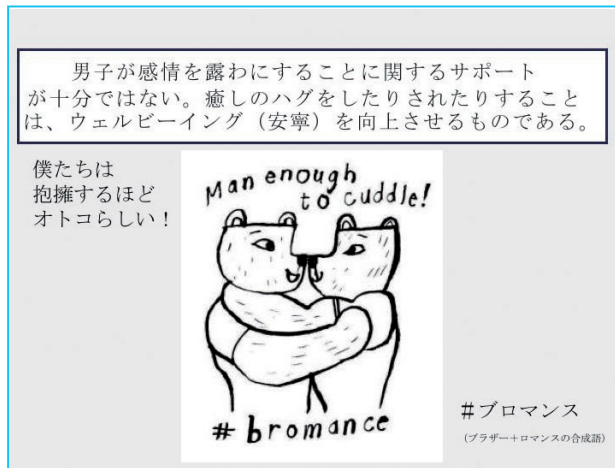
避妊や、セイファーセックス、より安全な、コンドームを使ったというようなセックスに関する事柄は、年齢に応じて話をすることが大事です。性の健康に対する責任を持つということを学ぶことが、自分だけではなく、他者をも守る、望まない妊娠や性感染症から守り、それぞれのセクシュアリティをそれぞれに楽しめるようにすることにつながります。

また、セクシュアリティというものがプライベートで、親密なものであること、それから、これは常に尊重されるべきものなんだよ、ということを子どもや若者に説明することが重要です。

健康的な自尊感情と安全な愛着関係を構築するという能力を育むために最も重要なのは、安全で、安定した大人同士のネットワークがあることです。社会的な孤立や恐怖というのは、不安定さや不安を増幅させます。そのことが鬱であったり、社会を嫌悪する、反社会的な行動をとるようになるなど、多くの心理社会的な問

題につながる場合があります。

子どもたちや若者というのは、誰もが感情や情緒のスキルを学ぶ必要があります。感情を意識すること、それから自己表現を身につけることが、本当の意味での強さになります。強さというのは、何も筋肉量ではないということです。



癒しのハグをしたり、されることというのは、実はすごく大事で、ウェルビーイング（安寧）を向上させるということがいろいろな研究で言われています。“Man enough to cuddle!” という英語がありますけれども——“cuddle”というのは抱擁です、ハグとか——ハグするほど私たちは男らしいよ、というようなメッセージの出し方というものが必要とされているのではないかと、というのでこういう絵になっています。

性的ではないタッチ、触れ合う、ハグについて、もっと教えていく必要があるということです。

すべての子どもや若者は、自分がかけがえのない存在であること、自分の価値が身体の大きさやカタチで決まるものではないことを学ぶ必要があります。

子どもたちは、自分はだめだ、魅力が足りないと思ったときに落ち込むわけですが、私たちみんなにあるんだよ、ということを教え、学んでもらう必要があります。そういう感情というのは持つことはあるけれども、過ぎ去るものだ、その感情も持つこと自体は当たり前、でも、いつか過ぎ去るものだ、ということ覚えておいてね、ということを教えることです。誰もパーフェクトな人なんていないんだよ、ということを含めてです。

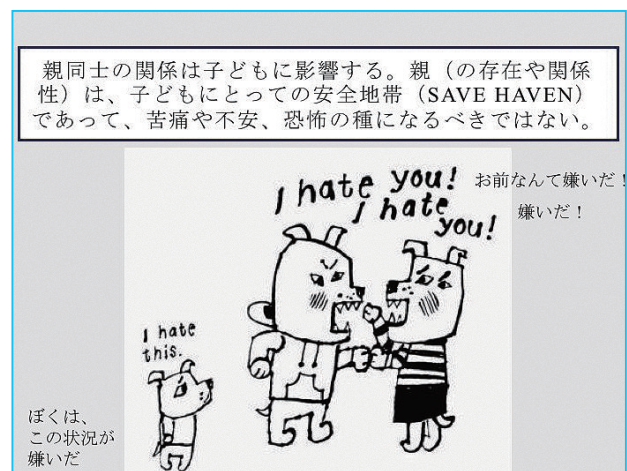
私のセックス・セラピーにくる男性の一番多い悩み、一つはペニスのサイズです。もう一つは、勃起機能障

害です。多くは、身体的には機能障害がないにもかかわらず、心理的な面、心因的な問題です。私のところに来るまでに、「ペニスのサイズなんて関係ないんだよ」、あるいは、「それで悩んでいるんだ」というようなことを十分に話す機会がなかった、というようなことが顕著にみられます。



子どもたちと話すべきこと、愛にはたくさんのカタチがあるということ、モダン（今どきの）ファミリーは多様で、愛も多様だということです。

子どもたち自身が健康的な自尊感情と自信を持つようになると、他人をよりリスペクトすることにつながります。差別やヘイトなどの多くがどこに根差しているかといったら、非常に低い貧しい自尊感情からきているというのはよくあることです。



子どもにとって、自分の親同士の関係というのは非常に大きな影響を与えます。親の存在や関係というのは、子どもにとって“安全地帯（Safe heaven）”であるべきであって、苦痛や不安、恐怖の種になるべきではないわけです。ホーム、家庭というものが安心、安全な場であるということが将来の性的な関係という

ことにも、セクシュアリティにも影響を及ぼすことがあります。

子どもにとって、自分がそういった人間関係を築く前、性的な関係を持つ前に、親というものが一番最初のロールモデルになるわけですから、そこでヘルシーな関係性が持たれているか、オープンな関係性か、それともいろいろながみ合いというか、話し合いというものが前向きなものなのかどうかみたいなことも含めて、子どもはずうっと見ているわけです。

子どもや若者、大人もまた、慰めや他者との親しさを必要とします。ハグを必要とします。このことを教えることは、子どもや若者に貴重なリソースを提供することになります。ここには、「話すのに疲れちゃった。ハグしよう」と書いてありますけれども、私自身も、たくさんのクライアント、患者を診て帰ってきたときには、疲れ過ぎて話すエネルギーがない、ただただハグされたいだけ、というようなことがあります。「そういうことは大人にもあるよ、それでいいんだよ」ということを若者に語っていくことが大事なのではないかと思います。

あらゆる経験が、自分という存在の糧になる。
過去というのは、現在や未来を規定するものではない。



最後になりますが、あらゆる経験というものが私たちを形成していき、「私」、「自分」という存在の糧になっていきます。トラウマ、虐待、暴力などの否定的な経験もそうですし、そして非常にポジティブな、肯定的な経験もそうです。それは私たちの中に生き続けるわけなんですけれども、しかし、過去というものが現在や未来を決定し、そこで終わってしまうわけではないということです。

私のクライアントの人たちで、例えばトラウマ関係といったら、性的な虐待を受けてきた、強姦された経験がある、近親姦の経験があるというような人たちが

います。そういう人たちのセラピーを通じて伝えることというのは、そういう経験があったからといって、犠牲者でい続ける必要はないということです。犠牲者ではない、あなたはあなたの人生の主人公になれるんだということです。

(イラストは、マッティ・ピックヤムサ氏)

質疑応答

土肥 私のほうから、お話を聞いた感想とか、私が思った質問などをしたいと思います。

皆さんも、多分似たような感じではないかと思うんですけども、とにかく前半部と後半部と2つに分かれていて、前半を聞きながら、もう日本で生きているのが嫌だと思うぐらいに絶望的な気持ちになりますよね。何とフィンランドは進んでいて、何と日本は遅れているかということが本当に伝わってきて、嫌になってきたんですね。

でも、後半を聞いて、一緒やん、現実は、と。だから、多分日本もフィンランドもとてもしんどい状況というのはあると思うんですね。その状況に対して、どういうふうにしていこうかというときに、フィンランドは包括的な性教育という方向へ舵を切ったのではないかなという気がしました。

いくつかキーワードがあったかなと思います。1つは、セーフティ、それからリスペクト、それからセルフ・エスティーム（自尊感情：self-esteem）、この3つが繰り返し繰り返しスライドに出てきたかなという気がします。

日本では、セーフティ、リスペクトとかセルフ・エスティームというのは——私はもともとは性教育畑ではなくて、人権教育の畑の人間なんです。在日コリアン、あるいは在日外国人教育、それから部落解放教育がもともとの私のフィールドなんです。その中で、人権教育の中でこの3つのキーワードはずうっと言われていたことが、フィンランドでは包括的な性教育のところで言われているということで、性教育と人権教育は本当につながっているということを深く感じました。

それから、もう一つ、メッセージとして伝わってきたのが、大人は完成した人間ではないということです。学校の教員も完成した人間ではない。完成した人間で



はないから、自分たちはまだまだ学び続ける存在であるからこそ、生徒たちからリスペクトされる、多分そういうふうな存在であろうとしているのかなという気がしたんですね。

日本では、オーソライズしようと思ったときに、私は完全な人間だという形でオーソライズしようとするんだけど、恐らくフィンランドではそうではない。「完全じゃないよ」で対応することでリスペクトされる、そんなことを感じました。

ちょっと手前味噌の話をしますけれども、私は数学の教員です。ですから、性教育とはまったく無関係のところにいるわけです。

ただ、私は試験前に授業の時間を少し余らせて、グループ学習をします。高校なんですけれども、私は、例えばこの間で言うと、全員が30点以上を取るようにしようという目標を立てました。そうすると、10点とか20点の子が頑張らないといけないとみんな思ってしまうんですけれども、ではなくて、80点とか90点の点数の子が、君たちが数学を解くスキルを独り占めするな、それをシェアしようというかたちで学びや学習をするんです。でも、子どもたちは友だちだから、雑談します。で、私に、「先生、先生、この子な、また新しい彼氏とつき合うて2週間目」とかいう話をするんですね。そうすると、私は、「オーケー、じゃ、セックスするときはコンドームを使え」とそこで性教育をします。セーファーセックス。

そういった意味では、人権教育もそうなんですけれども、「いつでも、どこでもできる」というのが私の基本なんですけれども、包括的な性教育というのは、そういうテイストがあるのかなという気がしました。

かつて、包括的な性教育の前に、フィンランドもそうではない時代があったのではないかな。その時代はど

んな性教育をしていたのかが一つです。それから、なぜ今のように変えていこうというふうになったのか。それを聞くことが、私たちが日本の性教育をこれからどう変えていくかということを考えるためのヒントになるかなと思うんですね。

アンティ 私たちが小さかったころというのは、セックスというのはリスクなものというような視点で語られることが多かったかと思います。セックスが語られるときには、どこか怖いものだったり、心配しなければいけないものが強調され、ポジティブな面というものあまり語られなかったのが昔の性教育ではないかと思います。

今、包括的性教育がなされているからといって、決してそれはパーフェクトなものではありません。どこでも、誰でも、包括的性教育ができていくかというと、決してそうではないんですけれども、しかし、その教育に携わっている人たちが頑張って目指している目標というものはそこにあります。

私は歴史について語るのに、専門家ではありませんけれども、フィンランドにおいては、性教育だけではなく、学習スタイルすべて、学習の制度全てが変わってきた。ただ、事実だとか情報を与えるということだけではなくて、子ども時代に対話も大切だし、より成長を遂げていく成人期になるに従って、ダイアログ（対話）というものが大事になってきます。

私たち大人というのは、あるいはプロフェッショナルでも、決してパーフェクトな存在ではありません。私は、自分はプロだけれども、専門家だけれども、何もかんでも知っているよというふりだけはしないように、と心がけています。クライアントの人たちと対話、セクシュアリティについて対話するときにも、それぞれの個人には、それぞれのかけがえのないセクシュアリティというものがあるのであり、個性があるということです。どう生きるべきなのか、どういうセクシュアリティを生きるべきのかなどという答えを私が持っているはずがなく、そこで対話をしながらお互いに探っていくということが大事です。

私自身も、今まで生きてきてそうでしたけれども、皆さんも、ほかの先生たちも、与えるだけではなくて、与え、与えられという関係性を通じてそれぞれに学んでいくところがあるんだろうと思っています。

いろいろなものがフィンランドでも変わってきました

たし、いろいろなものが発達してきて、一夜にして今の状況があるわけではなく、メンタルヘルスについての知識であるとか、対応について大きな変化がありましたし、そういうものが性教育に与える影響というのもあるし、昔は、もっと狭いファクトベースな、事実に基づいてみたいなのがやたらと言われていたんですけども、正しい知識というよりは、accurate information、より正確な情報を共有していくということが大事なんだというのは、過去からの教訓でもあるんです。

フィンランドと日本の専門家という違いがあるとすれば、フィンランドにおいては、サイコ・セラピストであるとか、メンタルヘルスにかかわる専門家として開業したり仕事をするためには、非常に長い期間の研修、訓練を受けて、有資格者にならないと名乗れない、実践できないという状況の違いがあります。

私は、サイコ・セラピストというふうに自己紹介するけれども、このサイコ・セラピストという肩書を取るためには長い年数を要します。

では、性教育はどのようなと言ったら、性教育には、それだけの長い研修とか有資格というのがないんだけど、でも、そういうのもあるべきだと思います。

土肥 もう一つだけ、「与え、与えられる」という話で、ああ、そうだなと思ったのが、私は数学の授業をするときに、多分、数学を教えるということを一番よく知っているのは、数学が苦手な生徒やろうな。つまり、何がわからないかということが一番はっきりさせてくれる子が数学が苦手な子なので、数学が苦手な子からわからないことを教えてもらうことで私は数学ができるようになる、そんなことを思ったりしました。

それをしようしますと、もう一つキーワードが出てきて、ダイアログです。子どもが話をしてくれないと教えられないという意味では、ダイアログというのはすごく大事ですね。

「p 4 c」というのがありまして、“Philosophy for Children: p 4 c”、ハワイ大学のドクターJという人がやっていることなんですけれども、子どもたちのための哲学です。子どもたちが対話を通して物事について考え、物事を深めていく。

そのダイアログを支えるものは、やはりセーフティ、ここでは何を言っても大丈夫という、その安心・安全

がないとダイアログは成立しないんですね。フィンランドでは、セーフティというものをどういうふうにつくっているのかというのが、もう少し知りたいです。
アンティ どのように子どもたちが話しやすい安全な場をつくれますかということなんですけれども、性やセクシュアリティについて話をするときに重要なのは、セーフティ、安心・安全であり、ノンシェーミング、恥ずかしいという思いをしなくても済むという環境がものすごく大事です。誰をも発言者を辱めない雰囲気づくりというのに気を配ります。

そのときに、例えばグループ、集団で性教育することが多いわけなんですけれども、小さなサイズにとどめておくということが非常に大事。現在みたいにこれだけ多くの人たちが一方方向を向いているスクールスタイル、こういうかたちだと、どなたも自分の親密な個人的な話をしようとは思わないと思うんですね。

土肥 どなたかご意見とか質問とかありましたら。

会場 LGBT 当事者です。

フィンランドの教育システムについて、少し確認させていただきたいんですけれども、障害児、視覚障害とか聴覚障害とか、肢体障害であるとか、特別ニーズを持つ子どもたちの学校というのは、メインストリームなのか、別なのか。特別ニーズを持った子たちが集まっている学校があるのか。両方が合わさって、一緒にやっているのか。

障害を持つ子どもたちに対しての性教育、普通の子どもたちとは違って、何か違ったアプローチというものがあるのかどうか、ご経験をお聞きしたいと思うんですが。

アンティ 「スペシャルニーズを持つ」という言葉が使われたので、どんなスペシャルニーズによるかによって、例えば病院の中に病児教育という形で教育が行われることはあります。しかし、それ以外の場合、視覚障害であれ、聴覚障害であれ、ほかの子たちと同じ環境で教育をするというところに力点が置かれています。

なぜならば、その子たちだけ別の学校に行かせるということは、グッドサインにならない。いいサインにならないからです。何かネガティブなイメージを与えてしまう。そうではなくて、みんなと一緒に学校に通うんだけれども、特別なニーズがある場合には、特別なアシスタントを学校側が提供する、それがフィンラ

ンドです。

考え方としては、性教育というのは誰もが受けるもの、同じように誰にも提供されるもの、これが基本です

会場 児童養護施設に関する性暴力について研究しています。加害児、被害児について、どんな特別な支援をしているのでしょうか。

アンティ 親元を離れて入所している子どもたち、特にそういう経験をしている子どもたちというのは、トラウマに関する特別なニーズがありますから、そういうものを手当てすることが必要であり、将来的なアタッチメント、いろんな人との愛着関係を構築するのに影響するわけですから、そういう施設で働く、あるいはフォスターペアレンツ——フォスターペアレンツというのは養父母——になる人たちというのが、トラウマに関する性暴力、トラウマに関する基本的な知識を持っていることというのが非常に大事になってくると思います。

一番大事なのは、そういう子どもたちが安心して語ることができるということです。子どもたちが語らなければ、私たちは情報を得ることもできず、ホリスティック（包括的、全方向的）なケアというものができ

なくなってしまう。

逆に言えば、そういうことができれば、かなりしんどい思いをした過去があったとしても、その子たちは犠牲者として生涯を生きていくのではなく、自分の人生の主人公となって生きていくことができるわけです。

フィンランドと日本の文化の違いがあるのかなと思うのは、自分の感情について、情緒面についての子どもたちとのコミュニケーションの仕方が、日本の親とはちょっと違うのかもしれない。だから、知らないことを「知らない」と言えるとか、「それは私にはちょっとわからないわ、待ってね」みたいなことが言えるかどうかという、ベーシックなところがちょっと違うのかもしれない。

自分に答えられないなという質問を受けて困っちゃったなというとき、フィンランドの親が頼ることができるのは、本であるとか、絵本であるとか、あるいはさまざまなNGOとか草の根の団体であるとか、そういうところ、それからプリスクール、幼稚園であるとか保育園であるとか、デイケアセンターとかでの会話をすることによって情報を得たり、どうやって答えたらいいかのヒントを得たりすることができるかと思います。

JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室について

JASE 資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約6万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

【閲覧】 必ず事前に電話で予約が必要です（tel 03-6801-9307）。貸出業務は行っておりません。

【開室日・時間】 月～金曜日 10：30～17：30

【休室日】 土・日曜日、祝日、年末年始 ※その他、会議等で臨時に休室することがあります。

【コピーサービス】 コピー料金は用紙サイズにかかわらず1枚10円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。

<http://www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html>

資料室 利用方法

収集文献・資料

統計・調査報告書、ジェンダー・フェミニズム、性教育一般・性教育の歴史的資料、国内雑誌、障害者、セクソロジー（自然科学系、人文・社会学系）、民俗学・文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書・指導書・学習指導要領、幼児期～青年期、国内学術誌、国際（海外団体資料・海外学術誌）、高齢者・家族問題、文学・評論・エッセイ・文庫・新書、官公庁資料、JASE 刊行物、映像資料、個人論文、雑誌記事、新聞記事、絵本・写真集・マンガ、江幡・篠崎・朝山・石川・ダイヤモンド文庫、ほか。

<http://www3.jase.faje.or.jp/cgi-bin/search1.cgi>